

子育てグループにおける母親の居場所に関する研究 II : 質的調査による母親の居場所概念の検討

鬼塚, 史織
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/25156>

出版情報 : 九州大学心理学研究. 13, pp.171-178, 2012-03-30. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

子育てグループにおける母親の居場所に関する研究Ⅱ —— 質的調査による母親の居場所概念の検討 ——

鬼塚 史織 九州大学大学院人間環境学府

Study of mothers' *ibasho* in child care groups II : An interview study

Shiori Onitsuka (Graduate school of Human-Environment Studies, Kyushu University)

The present study aims to examine the concept of mother's *ibasho* (existential place) in child care groups. This study uses the data collected from mothers' interviews and analyzes it using the KJ method. In the results, we find 11 categories of responses: talking with other mothers, making networks, gaining acceptance from other mothers, experiencing the comfort offered by the group, watching over children, the group becoming a part of one's life, bringing up children with other mothers, being happy to play a role, gaining maturity, feeling attached to the group, and including the other families in one's *ibasho*. Therefore, a mother's *ibasho* includes experiences of peer counseling, building of interpersonal relationships through child care, experiencing comfort, and possibilities of self-realization. Moreover, a mother's *ibasho* does not include the feeling that the child care group is one's own place and that a child care group is necessary for the relationship between mothers and children.

Key Words: child care group, child care support, *ibasho*, existential place

問題と目的

1. 現代の子育て環境

現代の日本において、地域コミュニティの崩壊、核家族化、少子化などにより、子育てをめぐる環境に大きな変化が生じている。そのような中、多くの母親は周囲から子育てのサポートを得にくい状況にあり、育児ストレスなどの困難を抱えながら孤独な子育てをしている。子どもの年齢が低い時期には、母親は外出する機会も少ないため、家の中で子どもと二人きりで過ごす時間が多く、母親はその毎日の繰り返しにストレスを感じていることが示されている(難波・松本, 2001)。また、母親が小さな子どもと24時間向き合う生活は、過度のストレスや不安などの感情を引き起こし、ノイローゼや虐待にいたるケースもある(大豆生田, 2006)。このような子育ての困難に悩む母親への救済策として、子育て支援が盛んに行なわれている。

2. 子育てグループ活動について

上述したように、現代の子育ては母親一人の肩にその負担のしかかることが多く、不安や苛立ちなどのストレスが大きくなりがちである。その問題を解決するために、孤立化した子育てから解放できるような親子の居場所づくりとしての支援が最も求められている。具体的な行政の支援策においては、「地域子育て支援センター事業」や当事者である親自身が主体となって取り組む「つどいの広場事業」などの推進が図られている。また、そ

のような居場所づくりの支援のひとつとして、子育てグループ活動がある。これは、子育てに対して、同じような不安や負担を感じている母親同士が、支援者としてお互いに助け合う場であり、「子育てサークル」や「子育てサロン」の形態で展開されている。現在の各子育てグループの行政との関わりや、活動頻度、規模などはさまざまであるが、これらの活動には、未就園児の親子を対象とし、親子ともども子育ての情報交換や交流を深める場としての活動が行われているという共通点がある。このような当事者による相互支援的なシステムは「ピア・カウンセリング」あるいは「ピアサポート」的な機能ともいわれ、子育て支援においても非常に有効性があり、意味があるものと考えられる(大豆生田, 2006)。子育てグループにおいて、母親は同じ悩みをもつ仲間と出会い、安心感、受容・共感を体験でき、それ故に母親の居場所となっていることが考えられる。

3. 子育てグループにおける「居場所」とは

これまで「居場所」に関しては、子どもの居場所、学校における居場所、というように主に児童から青年を対象にした研究が数多くなされている。杉本・庄司(2007)は、これまでに報告された「居場所」とは、(1)存在の肯定、存在の実感等自己存在感に関するもの、(2)精神的な安心や安定に関するもの、(3)他者から認められることや受容に関するもの、の3つが含まれることが多いと述べている。また、佐藤(2008)は、「居場所」を個人的要素—社会的要素、物理的要素—心理的要

素の4つの要素から捉え、「居場所」の4つの条件を次のように示している。(1)自分または自分たちが占有できる空間があること(自己占有性)、(2)他の人と交流できる空間があること(交流性)、(3)他の人に受容される雰囲気があること(被受容性)、(4)自己の存在が確認できる雰囲気があること(自己確認性)である。

中西(2000)によると、母親の不安や焦りを軽減するためには、家庭や社会における居場所の存在が大きく影響していることが明らかにされている。具体的には、家庭や社会において自分の居場所があると感じている母親は、主体的に自己の生き方を選択していく意思決定ができ、未来や育児に対しても肯定的な感情を持っていることが示されている。このことから、子育てに悩む母親の不安や負担を軽減するためのひとつの視点として、母親の「居場所」の重要性が十分に考えられる。

武田(2002)は子育てグループを担う当事者の情報収集能力、公的機関に依存しない独自の活動、専門的ではないがニーズを一番良く知っている点を挙げ、これらの力を生かしていくことが、これからの子育て支援の一つ

の方向性であると述べている。したがって、現代の母親の居場所として、グループのあり方を明らかにすることによって、子育てグループの意味を再確認し、その活動を支援していくことが必要とされていると考えられる。今、子育て支援に求められていることは、グループ子育ての真価を発揮できるようにすることであり(原田, 2006)、それらに生かすことのできる知見を、本研究を通して見出したい。

したがって本研究では、子育てグループにおける母親の居場所の概念を質的に検討し、その整理を行うことを目的とする。

方 法

調査対象：Z県内の子育てサロンYに参加する母親13名と、子育て当事者が運営主体である子育てグループに参加し、運営に携わったことのある母親11名、計24名(平均年齢34.4歳)に協力を得た(Table 1)。

調査時期：2007年9月～11月、2009年10月～12月

Table 1
調査対象者の属性

対象者	年齢	同居家族	所属年数	グループの形態	役割
A	23	父親, 第1子(2:6), 第2子(3)	1年2ヶ月	サロン	なし
B	33	父親, 第1子(5), 第2子(3)	5年3ヶ月	サロン	副代表
C	38	父親, 第1子(7), 第2子(2)	1年	サロン	なし
D	22	父親, 第1子(3), 第2子(2)	3年	サロン	会計
E	32	父親, 第1子(4), 第2子(1)	3年5ヶ月	サロン	なし
F	37	父親, 第1子(4)	2年	サロン	なし
G	37	父親, 第1子(6), 第2子(4)	4年	サロン	元代表
H	39	父親, 第1子(5), 第2子(4), 第3子(2)	1年	サロン	なし
I	28	父親, 第1子(2:10), 第2子(0:6)	3ヶ月	サロン	なし
J	31	父親, 第1子(7), 第2子(4), 第3子(1)	6年	サロン	なし
K	28	父親, 第1子(3), 第2子(1)	2年	サロン	なし
L	31	父親, 第1子(3), 第2子(0:8)	1年6ヶ月	サロン	なし
M	32	父親, 第1子(4), 第2子(1)	3年	サロン	なし
N	37	父親, 第1子(2:9)	1年5ヶ月	サークル	代表
O	35	父親, 第1子(2:5)	2年	サークル	会計
P	37	父親, 第1子(11), 第2子(8:1), 第3子(0:9)	5年	サークル	元代表
Q	45	父親, 第1子(16), 第2子(13), 第3子(11)	1年6ヶ月	サロン	代表
R	45	父親, 第1子(16), 第2子(13), 第3子(11)	4年	サークル	元代表
S	39	父親, 第1子(9), 第2子(7)	3年	サークル	代表
T	37	父親, 第1子(9), 第2子(8), 第3子(5)	8年2ヶ月	ネットワーク	元代表
U	32	父親, 第1子(6:7), 第2子(3)	6年	ネットワーク	代表
V	37	父親, 第1子(6:7), 第2子(3)	8年	サークル	元代表
W	37	父親, 第1子(6:7), 第2子(3)	2年7ヶ月	サークル	なし
V	42	父親, 第1子(13:9), 第2子(11:3), 第3子(7:1), 第4子(4:8)	11年1ヶ月	サロン	代表
W	40	父親, 第1子(14), 第2子(10), 第3子(7)	9年	サークル	元代表
X	34	父親, 第1子(2:1)	1年9ヶ月	サークル	代表

手続き：20～50分程度の半構造化面接

調査内容：

- a. 参加している子育てグループの場について（子育てグループの場を母親がどのように捉えているか）
- b. 参加者の考える一般的な「居場所」概念（その人自身の居場所の定義）
- c. 子育てグループは居場所であるかどうかについて（Yes or No）

d. 子育てグループにおいて居場所だと感じるエピソード
 分析方法：調査対象者24名のうち、参加している子育てグループが「居場所でない」と答えたC、F、Mの3名を除いた21名の面接の逐語録より「居場所」に関わる語りを切片にして抜き出しラベルを作成する。そのラベルをKJ法（川喜田、1967）を用いて分類・整理を行なう。

結 果

面接の逐語録より「居場所」に関わる語りを切片にして抜き出したものを、心理学を専攻する筆者を含めた大学院生3名で分類し、各カテゴリーに名前を付けた。今回の調査で得られた224個の切片を分類・整理し、上位カテゴリー、中位カテゴリーのみを記述した結果は以下の通りである（Fig.1）。Fig.1の詳細を表に記述したもの

が Table 2 である。

分析の結果、【1. 話ができる】、【2. 家庭以外のつながりができる】、【3. 受容してもらえる】、【4. 居心地がいい場所である】、【5. 安心して子どもをみられる】、【6. 生活の一部になっている】、【7. みんなで一緒に子育てをしている】、【8. 役に立てることがうれしい】、【9. 自分が成長できる】、【10. グループへの愛着がある】、【11. 家庭が居場所】という11個の上位カテゴリーが得られた。以下に、各上位カテゴリーの内容を記す。また、（ ）内にはラベル数を示す。

【1. 話ができる (37)】は、〔話を共有できる (17)〕、〔大人とおしゃべりできる (9)〕、〔子育ての生の声が聞ける (6)〕、〔同じ悩みを抱えていることに気づく (5)〕という4つの中位カテゴリーからなる。このカテゴリーは、居場所において参加者同士で話ができることに関するカテゴリーである。

【2. 家庭以外のつながりができる (36)】には、〔行けば誰かと会える (7)〕、〔知り合いができる (6)〕、〔子育て仲間とつながる (20)〕、〔メンバーの一員であると感じられる (3)〕という4つの中位カテゴリーが含まれる。このカテゴリーは、居場所において、子育てを通じた家庭以外の大人とのつながりができることに関するカテゴリーである。

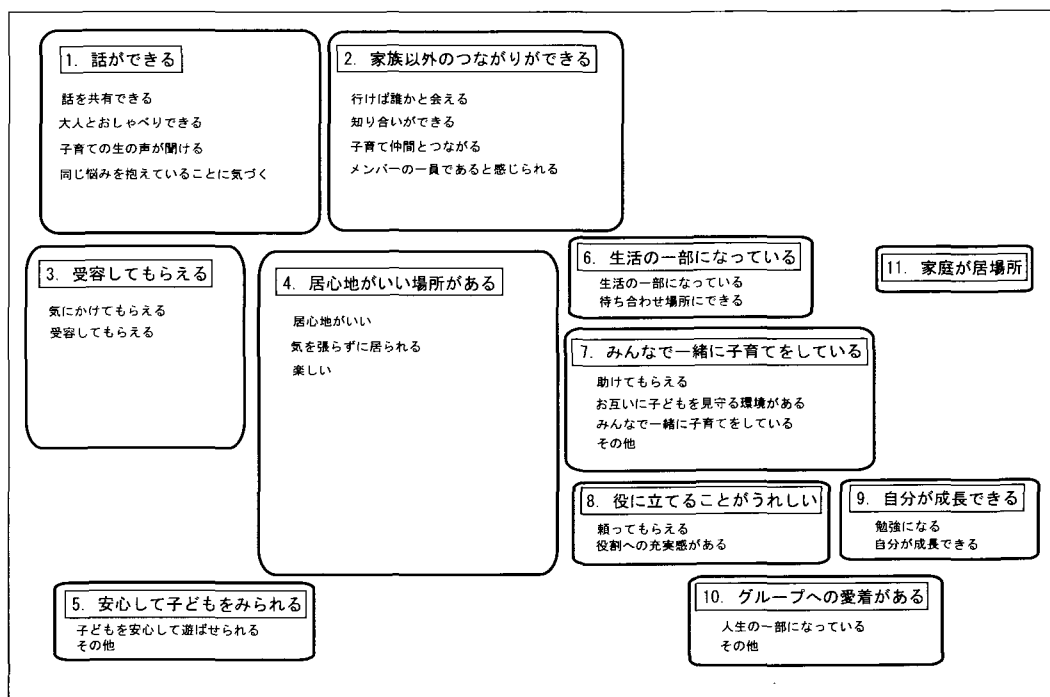


Fig.1 KJ法分析結果(中位カテゴリー以上)

Table 2
居場所に関する KJ 法結果

上位カテゴリー	中位カテゴリー	下位カテゴリー①	下位カテゴリー②	回答例
1. 話ができる (37)	話を共有できる (17)	話が合う (3) 共感し合える (7) グループだから話せる (6) その他 (1)		共通の話題がある 分かり合える 同じ子育てをしているから、話せること 似た者同士の中で過ごす
	大人とおしゃべりできる (9)	おしゃべりができる (7) 家族以外の大人と話せる (2)		親同士でいろいろ話しができる 家族以外の大人と会話ができる
	子育ての生の声が聞ける (6) 同じ悩みを抱えていることに気づく (5)			子育ての生の情報もらえるところ 相談しなくても、みんな同じようなことで結構悩んでたりするの で、来るだけでも、今まで悩んでいたことが、少しだけ明るくなる
2. 家庭以外のつながり ができる (36)	行けば誰かと会える (7) 知り合いができる (6)	顔見知りができる (2) 親子に友だちができる (4)		行ったら誰かが、誰かれ知り合いが居る 来ているうちに、顔見知りか母子ともにできてくる 子どもの友だちも、自分の友だちも含めて友だちができたとき
	子育て仲間とつながる (20)	入とつながれる (8) 子育て仲間と集える (5) 地域に知り合いができる (3) その他 (4)		子育てをしている人との繋がり 同じ子育てしている仲間がいる スーパーとかでも声をかけてもらえる 子育てで社会とつながれる場所
	メンバーの一員であると感じられる (3)			自分が参加できる場所がある
3. 受容してもらえる (28)	気にかけてもらえる (13)	声をかけてもらえる (6) 心配してもらえる (3) 自分の存在を確認できる (4)		来たときに、「ああ久しぶりー」とか「よく来たね」とか声をか けてもらったとき 活動してるメンバーから心配してもらえる 自分の存在、を確認するところ
	受容してもらえる (15)	受けとめてもらえる (10) 認めてもらえる (6)		みんなが受け止めてくれる 自分を認めてもらえる場所
	居心地がいい (24)	ほっとする (6) リラックスできる (9) 落ち着く (2) 居心地がいい (3) 温かい気持ちになる (2) その他 (2)		ちょっとほっと一息できる 居て緊張しない、リラックスできる サロンは落ち着く 居心地がいい場所 あったかくなる気持ちのサークル サロンは、親戚のおばちゃんみたい感覚
4. 居心地がいい場所 がある (56)	気を張らずに居られる (23)	安心して居られる (5) 気を張らずに過ごせる (8) 家と違って一息つける (2)		自分が安心して居られる場所 見もなくなさけらせる 家で長い時間しっかり麻ってることかないけど、サロンは腰を 落ち着かせて座れる場所
	楽しい (9)	ネガティブな感情から解放される (2) 安心して母親で居られる (4) 気を遣わずに子どもを遊ばせられる (2)		イライラすることを解消できる サロンは安心して母親で居られる場所 気を遣わずに、子どもを遊ばせられる
	羨ましい (9)	イベントが楽しい (2)		自分が楽しくいれるところ 大人の懇親会が楽しみ
5. 安心して子どもを みられる (6)	子どもを安心して遊ばせられる (5) その他 (1)	子どもが安心・安全に遊べる (3) その他 (2)		子どもが安心して遊んでるのをみてる時。 子どもが遊んでいる場所
	生活の一部になっ ている (5)	生活の一部になっている (3) 待ち合わせ場所にできる (2)		サロンは子育てしていく中での生活の一部 用事があるときにお互い来て、「じゃあサロンで会おうね」とか、 そんなときに使う
	助けてもらえる (4) お互いに子どもを見守る環境がある (19)	子どもの成長を見守ってもらえる (2) 自分の子どもを任せられる (7) トイレの時に子どもをみてもらえる (4) 子どもを預かってくれる (3) 他のお母さんが下の子を抱っこしてくれるとき		自分が困った時に助けてくれる友だちが何人もいる 子どもの成長を見守っていただけれる場所 トイレに行こうとしたときに、みてあげようって言ってくれたり 他のお母さんが下の子を抱っこしてくれるとき
7. みんなで一緒に子育 てをしている (28)	他の子どもにも愛着がわく (9) その他 (1)	他の子どもの成長も楽しめる (2) 他の子どもたちと関われる (7)		自分の子も、友だちの子も、成長する喜びを感じる時 自分の子どもを含めて、大勢と何かする 自分の家族や子どもも客観的にみれる
	みんなで一緒に子育てをしている (4) その他 (1)			できることはしてあげる、みたいな、お互いしてくれる お互いに成長している姿をみれる安心感
	頼ってもらえる (8)	必要とされている (5) 役割を任せてもらえる (3)		必要としてくれるんだなと思う 「役員をしてくれる？」って頼んでくれたことがうれしい
8. 役に立てることが うれしい (13)	役割への充実感がある (5)	グループでの役割を果たせた (3) その他 (2)		サークルと講師のつながりの連絡係をした 頑張りがいがある
	勉強になる (4) 自分が成長できる (3)			学ぶことがたくさんある 自分にとって、なんかプラスになる
	人生の一部になっている (2) その他 (4)			生きてきた証 自分が受けた恩を返したい かけがえのない場所
9. 自分が成長できる (7)				やっぱり家庭かなと思う

()内はラベル数

【3. 受容してもらえる (28)】には、〔気にかけてもらえる (13)〕, 〔受容してもらえる (15)〕という2つの中位カテゴリーが含まれる。このカテゴリーは、居場所において参加者から声をかけてもらうなど、自分の存在を気にかけてもらい、受け入れてもらえることに関するカテゴリーである。

【4. 居心地がいい場所である (56)】には、〔居心地がいい (24)〕, 〔気を張らずに居られる (23)〕, 〔楽しい (9)〕という3つの中位カテゴリーが含まれる。このカテゴリーは、居場所における“居やすさ”が表現されたカテゴリーである。

【5. 安心して子どもをみられる (6)】には、〔子どもを安心して遊ばせられる (5)〕, 〔その他 (1)〕と言う2つのカテゴリーが含まれる。このカテゴリーは、居場所において自分の子どもを安心して遊ばせられることや、見守ることができることに関するカテゴリーである。

【6. 生活の一部になっている (5)】には、〔生活の一部になっている (3)〕, 〔待ち合わせ場所にできる (2)〕という2つの中位カテゴリーが含まれる。このカテゴリーは、居場所が日常生活の一部となることを表すカテゴリーである。

【7. みんなで一緒に子育てをしている (28)】には、〔助けてもらえる (4)〕, 〔お互いに子どもを見守る環境がある (19)〕, 〔みんなで一緒に子育てをしている (4)〕, 〔その他 (1)〕の4つの中位カテゴリーが含まれる。このカテゴリーは、居場所において参加者同士が互いに子育てを支え合うことが表されたカテゴリーである。

【8. 役に立てることがうれしい (13)】には、〔頼ってもらえる (8)〕, 〔役割への充実感がある (5)〕という2つの中位カテゴリーが含まれる。このカテゴリーは、居場所において、必要とされること、役割を担えることへの充実感が表されているカテゴリーである。

【9. 自分が成長できる (7)】には、〔勉強になる (4)〕, 〔自分が成長できる (3)〕という2つの中位カテゴリーが含まれる。このカテゴリーは、居場所における母親自身の学びや成長に関するカテゴリーである。

【10. グループへの愛着がある (6)】には、〔人生の一部になっている (2)〕, 〔その他 (4)〕という2つの中位カテゴリーが含まれる。このカテゴリーは、子育てグループという居場所の位置づけが、「生きてきた証」というように参加する母親の中でも重要な位置にあることが表されているカテゴリーである。

【11. 家庭が居場所 (2)】には、2つのラベルのみであったが、子育てグループという社会における居場所がありながらも、家庭においても同様に自分の居場所があることが表されているカテゴリーである。

考 察

1. 先行研究からみる子育てグループにおける居場所

本研究の目的は、子育てグループにおける母親の居場所について質的に検討し、その概念の整理を行うことであった。まず、先行研究との比較から、前提として子育てグループが母親の居場所となりえるのかどうかを検討したい。佐藤 (2008) の示す居場所の4つの条件に照らし合わせると、まず (1)「自分または自分たちが占有できる空間がある」、(2)「他の人と交流できる空間がある」という条件に関しては、子育てグループの物理的側面において明らかに合致している。また、(3)「他の人に受容される雰囲気がある」、(4)「自己の存在が確認できる雰囲気がある」という条件に関しては、【3. 受容してもらえる】というカテゴリーにおいて「受け止めてもらえる」、「自分の存在を確認するところ」といったように、その条件が満たされていることが確認できる。したがって、子育てグループの場合は居場所の4つの条件を満たしているといえるだろう。さらに、松永 (2005) は、親子にとって望ましい「居場所」とは、子育ての中の日常生活を楽しむために必要な、生活の一部になっている場所であり、自発的な人間関係によって「労力」を解消するという意味の「地域」の枠組みであると述べている。【6. 生活の一部になっている】というカテゴリーにおいてそれが示され、子育てグループが親子にとって望ましい居場所となっていることが示された。これらのことから、子育てグループが母親の居場所となりえることが確認された。

以下では、本研究においてみられた子育てグループにおける母親の居場所の概念を考察する。

2. ピア・カウンセリングの体験が得られる場

まず、子育てグループにおける居場所は、ピア・カウンセリングの場となりえるということが推察された。原田ら (2002) が「子育てサークル」は、母親の自助グループであると定義するように、参加者同士が話をして、その話に共感・受容してもらうことができ、お互いに支え合うという体験を得られることが推察される。この体験は、「高度な訓練を受けた専門家のカウンセリング・サービスではなく、同じか似たような年齢グループに属する相手に対して、手を差し伸べ、支援し、話に耳を傾けるというごく自然な傾向の延長線上にある所行為 (Helen Cowie & Sonia Sharp, 1997)」と定義されるピア・カウンセリングの体験であると考えられる。このような特徴は、【1. 話ができる】、【3. 受容してもらえる】、【7. みんなで一緒に子育てをしている】というカテゴリーに示されている。特に、【1. 話ができる】というカテゴリーでは、同じ子育てをする当事者同士がお互いに話すこと

によって、子育てに関する情報が得られたり、お互いに同じような悩みを抱えていることへの気づきが得られるという母親の姿が示されている。家族以外に育児の相談をできる人がいることと抑うつとの関連が主張されているように(草野・小野, 2010), 子育て中の母親にとって重要な存在が居場所において得られることが考えられる。

3. 子育てを通じた人間関係が築かれる場

次に、居場所にいることによって、子育てを通じた人間関係が築かれる様子が示唆された。これは、【2. 家庭以外のつながりができる】の内容に表現された特徴である。「行けば誰かと会える」というカテゴリーには、その「場所」があることの意味が含まれており、居場所の物理的側面を表していると考えられる。しかし、単に場所が提供されている、ということのみを表しているのではなく、そこには「行けば誰かいる」というように、人が存在していることも含まれている。したがって、母親の居場所には、物理的に集まれる場所があることと、そこに誰か迎えてくれる人の存在があることが重要であると考えられる。また、原田(2006)は、「子育てサークル」は時間と場所が決まっているため、すなわち約束ができていたため、「人づきあいが得意ではない」という母親も参加しやすいと述べている。これに関して、グループとして集う場所があることの特徴として、毎回場所と時間が決まっているという意味の約束があることによって、個人的に約束をしなくとも必ず誰かと会うことができるという安心感がある。さらに、子どもの状態に左右される母親たちにとって、「約束」のように強い束縛をされることの負担が少ないことも参加しやすい条件であるといえる。

4. 居場所感が得られる場

田中・田窪(2004)は、居場所があるときに感じられる安心感などを居場所感とし、子育てグループにおける居場所でも、同様の居場所感が得られることが示された。具体的には、【4. 居心地がいい場所である】といったカテゴリーに示されている。母親が子育てグループの場において、「ほっとする」、「自分が楽しくいれるところ」といったポジティブな感情を抱きながら過ごすことができることが推察される。佐藤(2008)は、癒しの場について、気のおけない仲間がいて、気分が安らぎ自己を解放できる空間として機能していると述べているが、子育てグループにおいても居場所の癒しの場としての心理的機能が果たされていると考えられる。まさに、「気楽に過ごせる」という回答においてその機能が示唆されている。

5. 母親の自己実現が可能となる場

山縣(2004)は、母親が子育てに翻弄されることからくる悪循環を断ち切り、母親自身の自己実現を図るためのサービスも子育て支援では求められると述べている。母親の自己実現に関するカテゴリーは、【8. 役に立てることがうれしい】、【9. 自分が成長できる】がある。まず、【8. 役に立てることがうれしい】には、子育てグループの場において、やりがいをもって役割を担うという母親の姿が推察される。また、【9. 自分が成長できる】のカテゴリーにみられる「自分にとってなんかプラスになる」、「成長できる」という回答は、母親自身が自己の成長を実感していることが表されている。このことから、母親の自己実現を図るような支援が、子育てグループにおいて得られることが考えられ、今後の子育て支援へとつながる知見であるといえる。

また、【10. グループへの愛着がある】には、母親にとって子育てグループの場が必要な場所となっていることが窺える。その中でも、「自分が受けた恩を返したい」といった回答は、参加者同士の相互支援的なシステムを構築するための鍵概念となるのではないだろうか。原田(2006)は、子育て支援、次世代育成支援、子ども虐待予防策のひとつとして、子育てサークルやつどいの広場・子育てサロンを新たにつくること、そして親自身が主体的に運営できるように支援することを挙げている。これらのカテゴリーが得られたことから、親自身が主体的に運営することによって、母親の自己実現を果たすことができる可能性が示唆されると同時に、母親の活動を奪ってしまわないような支援の重要性が推察される。

6. 「子育てグループにおける母親」の居場所に特徴的な点

最後に、「子育てグループにおける母親」の居場所に特徴的な点を2点述べる。

子どもや青年の居場所には、「ひとりの居場所」が含まれる場合があるが(杉本・庄司, 2006), 子育てグループの居場所には、「ひとりの居場所」は含まれていないことである。子育てグループに参加する母親たちは、まずは出会いや人と繋がることを目的として参加することが多いため、その場で「ひとりになれる」ことを望んでおらず、それを居場所だと感じることはないといえる。次に、【5. 安心して子どもをみられる】というカテゴリーに示されるような、母親と子どもとの関係性が持ち込まれるといった点も、これまでの居場所研究では示されていない特徴的な部分である。参加者は子育て中の母親であるため、当然子どもと一緒にグループに参加することがほとんどであり、子どもの話をしたり、子どもに呼びかけたり、子どもを通しての交流から始まる。そのように子どもを媒介として、母親たちは関係性を深めていく

ことが推察される。子育てグループにおいて、母親と子どもの関わりが必ず存在し、自分の子ども、他の子どもを含めてそこに参加している子どもと母親の関係性が母親の居場所には欠かせないものであることが窺える。

また、中西（2010）は、母親・父親とも社会において自分でいられるための居場所を獲得するには、家庭において居場所感を獲得していることが重要であることと述べている。このことから、【11. 家庭が居場所】のカテゴリーが得られたことは、母親にとって子育てグループが居場所となるための前提として、家庭が居場所となっていることが示唆されている。

7. 総括

以上より、本研究から得られた子育てグループにおける母親の居場所とは、(1) ピア・カウンセリングの体験が得られる、(2) 子育てを通じた人間関係が築かれる、(3) 居場所感が得られる、(4) 母親の自己実現が可能となる場であることが示された。具体的には、母親の居場所とは、物理的側面として居心地のいい集う場所があり、そこには迎えてくれる子育ての仲間がいる場所である。また、その場において参加者同士が関係を築き、グループの仲間から受け入れられる体験や、必要とされる体験を得られ、やりがいをもって活動する体験を得られる。そのような関係の中で、みんなで一緒に子育てをすることや、自分にとってかけがえのない場であることを感じられる場であると考えられる。

原田（2006）は、日本の現状として親グループを育てていくという役割は、どの専門職もその専門性として持ち合わせていない状況を挙げ、今後、子育てサークルがグループ子育ての本領を発揮するためには、そのような人材の関わりが必要であると述べている。本研究で得られた子育てグループにおける居場所の概念は、今後の子育てサークルがグループ子育ての本領を発揮していくための、支援の知見を提示できたのではないだろうか。

今後の課題

本研究で用いたKJ法による分析では、時間軸を特定できない断片的な情報であるため、実際の時間軸に沿った検討をすることができなかった。松田（2005）によると、居場所づくりは、当事者が自分たちの居場所として獲得していくプロセスそのものだと考えられている。したがって、母親が子育てグループの中で居場所を獲得していくプロセスを明らかにすることによって、母親へのより具体的な支援を見出すことも今後は必要だと考えられる。

付記

本論文は2007年度に九州大学教育学部に提出した卒業論文の一部と2009年度に九州大学大学院人間環境学府に提出しました修士論文の一部を再分析し、加筆・修正を加えたものである。本論文の作成にあたり、貴重なご指導、ご助言をいただきました九州大学大学院人間環境学研究院田嶋誠一先生に心より感謝申し上げます。そして、調査にご協力いただきましたお母さま方に深謝いたします。

引用文献

- 原田正文・福井聖子・服部祥子 2002 現代日本における子育て支援方策に関する研究（第1報）—関西地区における「子育てサークル」に関する統計的調査—大阪人間科学大学紀要, 1, 69-74.
- 原田正文 2006 子育ての変貌と次世代育成支援—兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防—名古屋大学出版会
- 原田紀子 1996 子育てをしている母親のサポートグループを通じたエンパワーメント 看護研究, 29(6), 47-58.
- Helen Cowie & Sonia Sharp, 1997 ピア・カウンセリング 同輩支援を理解し準備する ヘレン・コウイー & ソニア・シャープ編 高橋通子訳「学校でのピア・カウンセリングいじめの問題解決に向けて」川島書店
- 川喜田二郎 1967 発想法—創造性開発のために 中公新書
- 草野恵美子・小野美穂 2010 社会的な要因に関する育児ストレスが母親の精神的健康に及ぼす影響 小児保健研究, 69(1), 53-62.
- 松永愛子 2005 地域子育て支援センターの役割について—多重性の中での「居場所」創出の場として—保育学研究, 43(2), 52-64.
- 松田妙子 2005 子どものいる場所—今、子どもたちはどこにいるのか—乳幼児の母親の居場所 現代のエスプリ 至文堂 pp154-163.
- 中西友美 2000 若い世代の母親の居場所感についての基礎的研究 臨床教育心理学研究, 26(1), 87-96.
- 難波茂美・松本雅子 2001 地域における母子クラブの有効性について 保健婦雑誌, 57(13), 1076-1079.
- 大豆生田啓友 2006 支え合い、育ち合いの子育て支援 関東学院大学出版
- 佐藤晴雄 2008 地域の中の居場所 児童心理, 62(5), 520-525.
- 杉本希映・庄司一子 2006 「居場所」心理的機能の構造とその発達的变化 教育心理学研究, 54(3), 289-

299. 市トロントの発想 平凡社新書
杉本希映・庄司一子 2007 子どもの「居場所」研究の
動向と課題 カウンセリング研究, 40(1), 81-91. 田中・田嶋 2004 中学校における居場所に関する研究
九州大学心理学研究, 5, 219-228.
武田信子 2002 社会で子どもを育てる 子育て支援都

付 録

面接シート

- Q1 あなたにとっての「参加しているグループ名」はどんな場所だと思いますか
- Q2 一般的に子育てサークルやサロンは、子育て中のお母さん方の居場所だとよく言われていますが、あなたにとっての「居場所」とはどのようなもので、またどんなイメージだと思われますか？
- Q3 「参加しているグループ名」では、どんなときに居場所だなあと感じますか？具体的な出来事や瞬間がありましたら教えてください。